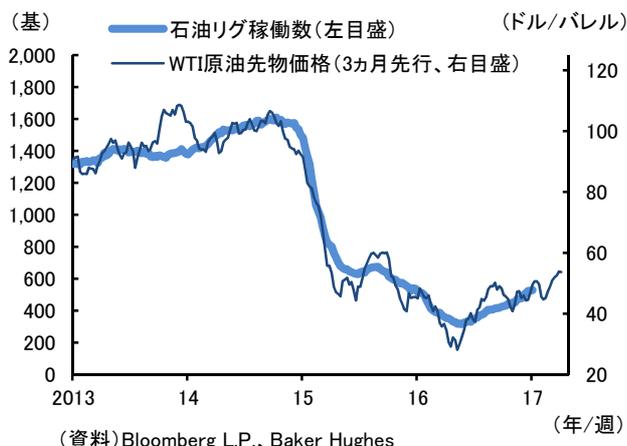


米国シェールオイル生産と原油価格の行方

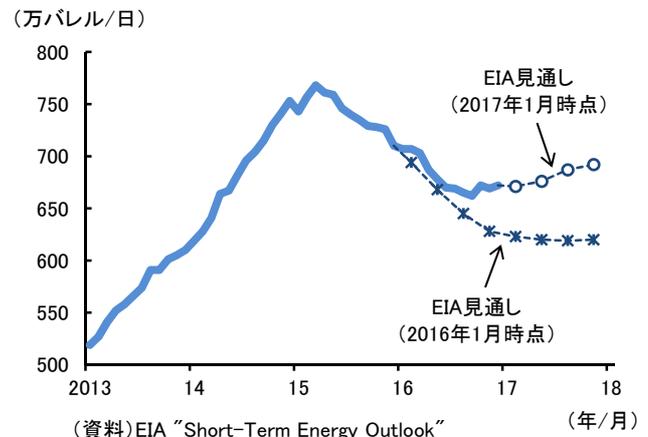
～ 原油価格が50ドル台半ばを上回れば、増産加速で上値抑制圧力に ～

- (1) 米国では、2016年春先の原油価格の底入れを受け、16年6月以降、石油掘削設備（リグ）稼働数が増勢に転化（図表1）。こうしたなか、原油生産量（アラスカおよびメキシコ湾を除くベース、同生産量の約7割がシェールオイル）も足許で増産に転じつつある状況（図表2）。
- (2) ただし、米国の主なシェールオイル生産地域のリグ稼働数をみると、恵まれた地質構造を有し、生産コストが相対的に低いとされるパーミアン地域で大きく持ち直している一方、他の生産地域の持ち直しは限定的（図表3）。今後のシェールオイルの増産ペースをみるうえでは、原油価格の上昇とともに、リグ稼働数の回復がこれらの地域にも波及していくかが焦点に。
- (3) シェールオイルの主要生産地域のひとつであるナイオブララを管内に有するカンザスシティ連銀の調査によると、エネルギー企業の採算水準は、技術革新による生産性の向上やコスト削減などを反映して、2016年入り以降、50ドル台前半まで低下（図表4）。このため、原油価格が50ドル台半ばを上回る水準まで持ち直せば、パーミアン地域以外でのシェールオイル生産にも弾みがつく可能性。
- (4) 以上を踏まえ先行きを展望すると、OPEC加盟国やロシアなどによる減産が着実に進めば、原油価格は現行水準（50ドル台前半）から上振れると期待される一方、同時にシェールオイルの増産を促す公算が大。米国での供給余力が大きいだけに、原油価格の上昇ペースは緩やかにとどまる見通し。

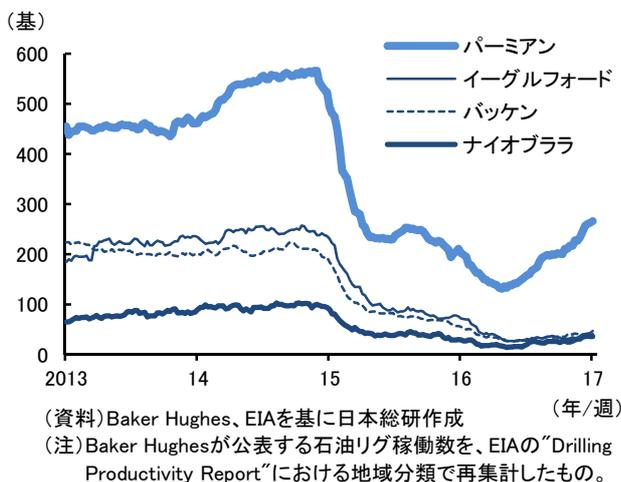
(図表1) 原油価格と米国の石油リグ稼働数



(図表2) 米国の原油生産量(除くアラスカ・メキシコ湾)



(図表3) 主なシェールオイル生産地域の石油リグ稼働数



(図表4) エネルギー企業の採算水準 (カンザスシティ連銀調べ)

